

令和5年度
喜須来小だより
4月号
まごころの教育推進校

まごころ

《校訓》
ただしく・やさしく・
たくましく
《問い合わせ》
TEL: 0894-36-0303
FAX: 0894-36-0189

いのちいっぱい 感動いっぱい ～ ありがとうの旅を続けよう ～

校長 脇坂 耕三

本日、私たちは、新たなクルーを乗せて、再び帆をいっぱいに広げ出港しました。多くの荒波を覚悟して、クルー全員で突き進みます。どうぞお力をお貸しください。

今年度の喜須来小キャッチフレーズは、「いのちいっぱい 感動いっぱい ～ありがとうの旅を続けよう～」です。この合い言葉に含まれている意味を一つ一つ確かめながら、がんばっていききたいと思います。

まごころ4月号に当たって、三つのお話をします。



一 子どもが親の手を握る時は、親が子どもの手を握るのではなく、子どもが親の指を握り、それを包み込むように親が握り返してあげる。子どもが親の手から離れたい時は、指を握った手を緩めるはず。親はそれを察知して、そっとはずしてやる。子どもは、親とスキンシップを繰り返しながら、親の元にいたいときと親の元から離れたいときを親に合図している。そして、親の手から離れたとき、いろいろなことが起こる。例えば、転んだり、こぼしたり、失敗したり。しかし、子どもは、転びながら転ばなくなる。こぼしながらこぼさなくなる。失敗しながら失敗しなくなる。手を離さず、その経験をいつまでもさせなかったら、いつまでも転び、いつまでもこぼし、いつまでも失敗してしまう。いのちはこうして繋がっていく。失敗は成功のもとであり、失敗は成長のもとである。

二 江口季好 詩「あこがれ」より

小学校1年の6月でした。授業中、ぼくは小便をがまんしきれなくなりました。先生に、「どうしたの」と聞かれて、「しょうべん」と小さな声で言いました。教室を出ると長い長い廊下。雨のせいか、遠くはうす暗く見えました。(中略)そして、ぼくは小便をもらしていました。先生はあわてて雑巾を何枚も持ってこられました。ぼくは、真っ赤になって机にしがみついていた。先生は、ふいてはしぼり、ふいてはしぼりして、そのころ24・5歳の未婚の美しい手を、水を拭くように動かしておられました。その手をぼくはじっと見ていました。オルガンをひいて、きれいな音色を出してくださるその手。おにごっここのとき、いつもつながるその手。先生は拭き取りながら、ときどき、やさしい顔でぼくを見ておられました。だから、友だちもやさしい顔でぼくを見ていました。教師になって20年。ぼくはまだ先生の境地に達しないと、1年生のころを思い出しては、はかま姿の先生にあこがれ続けています。

— 江口先生は、こう語ります —

感動によってこそ子どもたちは成長していきます。命令、禁止、叱責、威嚇、体罰、暴力ではなく、美しい感動の共有によってこそ子どもたちはすこやかに育ってゆくのです。

三 ある学校の入学式PTA会長さんの言葉より

(前略) 子どもたちは、取り巻く環境が、今まで以上に複雑になり、さらに大人へと大きく成長していくことと思います。その過程で起こる小さなことを、どうか見逃さないでください。子どもたちには、冷たい厳しい風が必ず吹き荒れます。その時は、そっとしておくのではなく、子どもたちの声をしっかりと聞き、どんな言葉であろうが、その言葉の重さを受け止めてあげてください。そして、必ず話してくれた後には、「話してくれてありがとう。」と言ってあげてください。子どもたちに、ありがとうと言われた経験をたくさんさせてあげてください。ありがとうという言葉には、自分自身と相手の心をやさしく大きくしてくれる力があります。(後略)